

山岡莊八

燃え、軌道

1 暁雲の巻



学習研究社

燃える軌道 第1巻 暁雲の巻

昭和49年8月20日 初版発行

著者 山岡 莊八

発行者 古岡 秀人

発行所 株式会社 学習研究社

東京都大田区上池台4-40-5

郵便番号 145

電話 東京 720-1111

振替 東京 142930

印刷 壮光舎印刷株式会社

製本 株式会社石毛製本所

編集責任 桜田 満

編集担当 藤原宣夫

編集協力 グイニチ出版株式会社

©1974 Sôhachi Yamaoka

Printed in Japan

※この本に関するお問合わせやミスなどがありましたら、文書は東京都大田区上池台4丁目40番5号(〒145)学研ユーザー・サービス部「燃える軌道」係へ、電話は東京(03)720-1111または東京(03)727-1600へお願いします。

目次

瀬と淵と

181

桃源郷か

132

一つの夜明け

90

微かな光

60

嘆きの天地

31

鳩の糞

7

さらば耶馬溪

223

嘆きの栄転

261

さらば故郷よ

323

装幀・題字
田代光

挿画
田代光

燃える軌道

1

暁雲の巻

鳩の糞（一）

千九一が、小学校の進級試験を受けて戻ったとき、母のりえは、西陽の明るく射し込む母屋の座敷に、厚漉きの三桎紙をひろげて秋蚕の蛾に卵を産ませていた。

種繭を喰い破って出て来る蛾の生命はひどく短い。まず雄と雌とを組合せ、これを厚紙を切って作った径五センチ、高さ三センチほどの輪に納めて、その輪なりに丸く産卵させる。それがびっしりと型紙の中を卵で埋めつくす頃には、すでに母の蛾は羽搏きまでが弱まっている。

考えてみると、どこまでも人間との類似を想わす蛾と卵の関係だった。

人間は、この蚕卵紙の上の輪型の代りに、地上へ家を持っている。決して他人の領分で羽搏くことは許されず、誰がどうして選出するか、良人と妻とが、とにかく一組に組みあわされて家に棲みつく。

鳩の糞
そう言えば、今年十歳の長男の千九一もそうして産まされた卵ならば、次男の又治も、まだ殻の軟らかい卵であった。

しかも、その卵のよしあしはすべて両親の蛾の良否に繫^{つな}がっている。

「——お前はよい子か？」

と、改めて訊^きいてみるまでもない。そこにはすべて約束された結果だけが生き継がされてあるのでは……？ ふとそう思ったその眼つきが、真剣に光りすぎていたのだろう、千九一は声を殺すようにして、

「おっかん、行^いっちゃ来た」

と、小声で言^いって、弁当殻^{がら}を差出した。

りえは思わず眼を和^なめた。

「今年も広池の種（蚕種）はいいのが採れます。どう、お前の方は出来た？」

「うん、試験の場所は正行寺^{しょうぎやうじ}じゃった。小倉県の大参事^{だいさんじ}がお出^いでになったき、おり（俺）ア

八級と七級と二つ受けたど」

「まあ二つも！ 大丈夫か」

「生温^{なまぬ}るか。おりア、おっ父^とんとおっかんの子じゃで」

りえは、あわてて又輪の中に羽搏く二匹の蛾を見やった。父と母の子だから出来るのだ、と、胸を張^かっていう年より小柄な千九一が、却^{かえ}って何か痛ましい気がしたのだ。

「人間は根氣^{ねき}じやきに、急ぎすぎてはならんでえ」

「知っちよる。成績は、明日学校で聞かしちくれると」

「そう、そりゃよかった」

りえは、二匹ずつの蛾を輪型の中に配りおわって席を立った。

小春日和こはるびよりというのだらう、十二月に近いというのに、まだ軒先にひろげて乾ほした粟あわと大豆のむしろに陽ひが当たっている。

時は、学制が施されて三年目の明治八年、所は、豊前国ぶぜんのかくに（大分県）下毛郡しもげ鶴居村つるいの永添ながそえ（現在中津市）部落にある広池半六ひろいけはんろくの家であった。

半六は、まだ野良のらから戻もどっていない。と、思った時に庭先で、当の半六の豆に群がる鳩を追うばげしい声が聞えて来た。

「しょうむねえ奴やつちゃ。この下奴げどされめ。お前等ちも、ちつとは福沢先生の本でも読んで憩いこわんか」

パンパンパンと掌てを鳴らして鳩を追散らしながら、厩うまやの方へ入っていった。

そう言えばこれは中津藩の六人者（下士かし）の出である慶応義塾の福沢諭吉ふくざきちが、「学問のすすめ」を書いた明治五年から三年目に当たっている。

父の声を聞いて、千九一はすぐに厩へ走った。

鳩の糞（二）

「おっ父^とん、只^{ただいま}今」

千九一^{ちくいち}は、やはり昂^{こうふん}奮していた。

「八級と七級の試験二つ受けて、みんな出来たき、今日は鳩^{はと}をあんまり叱^{おど}らんで」

「なに、二つ受けたと?!」

半六は、先^まずおどろきの表情を見せて、それから強く舌打ちした。

「バカもん、試験と鳩は関係ないわ」

「でも、又治^{また}が眼をさますもん」

「千九一、おっ父^とんが、お前に勉強せよというの^はな、試験に通ればよいというのではないぞ。鳩^と糞^{ふん}になるなということだ」

「鳩^と糞^{ふん}……?」

「そうだ」

半六は急いで馬のくつわを外し、ま^ませ^せをかけて厩^{うまや}を出ながら、眼を細めて、縞^{しま}の筒袖^{つつまそで}姿の千

九一の肩を叩いた。

「学問というのはな、世の中を救うためにある。中津の鳩になるなど言うこっちゃ。福沢先生は何と言うちよるか知っとるか？　こんな処に誰がいるものか、一度出たらば鉄砲玉で、再び帰りはしないぞ。今日こそいい心地だと後向いて唾して、颯々と足早にかけ出したのを今でも覚えてる——と語っている。何のために故郷をそんなに嫌ったか、鳩を嫌ったんだ。鳩の糞をな」

力をこめてそう言って、それからハハハ……と笑ってみせた。

「そうか、お前にはまだ無理じゃの。よし、お婆の手伝いをするがいい。父は鳩の機嫌など取るもんじゃないぞ」

千九一は首を傾げて父のそばを離れた。父は母と共に、乾してあった雑穀類を納屋にしまいにいった。

そう言えば、この家屋敷も、すでに古びた人間の巣であった。松の木が多い雑木に孟宗竹の林を混えた宅地の広さは七百坪近い。その中に二十七坪の萱葺の母屋があり、十八坪の厩を兼ねた納屋と四坪あまりの物置小屋とが並んでいる。

何時の頃、この家がここに建ったのか千九一は知らない。その昔、この国の一の宮であった宇佐八幡の大宮司であり、医者時代もかなりあったというのだから、余程古い家系に違いな

い。しかし現在の広池家は、いわばありふれた中農だった。

田畑山林すべてをふくめて三町歩あまり、豊かでない証拠に、武士であった武信家から嫁いで来ている母も、父と共にせつせと稼いだ。養蚕はむろんのこと、製紙材料の三桎を植えたり、漆の木を栽培したり、遠く広島から夏蜜柑の苗を取りよせて、果樹園の経営に失敗したりもしていた。

養蚕だけは成功の部類なのだろう。わけでも「——広池の蚕種」は近隣で好評だったが、それとて家を富ますほどのものではなかった。

千九一が裏から土間に入ってゆくと、祖母のわかが、身をかがめて竈に火を焚付けたところであった。

「お祖母ン、おっ、おんは昔から、あんなに鳩がきらいだったンけ？」

「どうしてじゃ」

「でも、鳩にやさしゅうして、と言ったら怒られたモン」

すると、祖母はちよつと眉根を寄せて、

「鳩の話はならんど。鳩に怨みは数々ござるじゃけ」

と、語尾におどけをみせて笑った。

鳩の糞 (三)

鳩というのは、元来が神社や寺院に付きものの平和の象徴だ。首をすくめて鳴く声も、まんない眸ひとみも愛くるしい。

しかしその鳩が、中津藩近郊の百姓たちには、極度に嫌きらわれる生き物になっていた。

その理由は簡単だった。中津藩の上士じょうしの中に、広大な鳩の巣箱を持っていて、そこに棲すみつ鳩の糞ふんを、染料として町人に売る者があるからだった。

中津市史によれば、それは沈滞しきった幕末期の武士の生活の行き詰りから生れている。一例をあげれば家老某の軒先にも、土蔵にも、幾つも鳩小屋があったと書いてある。

そして採取した糞の量も決して少ないものではなく、或る記録によれば、二月十五日に正味二百二十三貫六百匁を売り、更に五月四日に百七十七貫六百匁を売って、二度で参貫百七十余匁の銀を稼いだことが明記されている。

侍たちは巣箱をやたらに作ってやっても、別に飼料をやりはしないのだ。鳩は各自勝手に近くの田畑で食べて戻もどって、糞だけ巣箱あるじの主に提供するのだから、まことに皮肉な結果になっ

た。

むろん何度か農民から苦情が出て、鳩の飼育は禁止されたのだが、結局それは実行されず、明治維新のころまで続いた。いや、その怨みの巢箱がまだどこかにあるという噂であった。

福沢諭吉が、こんな故郷に二度と帰って来るものかと、家郷を捨てほど行き詰っていた当時の武士たちの貧しさから来るエゴイズムが、実は農民の鳩ざらいとして不思議な姿で残っていた。

「——鳩糞で食ってけつかる」

「——誰がいったえ餌をやっちゃうのか！」

その怒りが鳩にあたる結果になるのも、人間が貧しすぎる故だと祖母は言った。

「おっとんは口喧しいが、やさしい人じゃけ、怒られても気にしんなや」

「ウン、でも、話が少しおかしいど」

千九一は首を傾げて土間を掃きはじめた。

（——鳩が悪いのではない！）

鳩は、あちこちで餌を稼いで侍衆を助けている。百姓から見れば憎い鳩も、侍衆にとっては律義な恩人ではないだろうか……？

父がそれを一途に追ひ払おうとし、鳩の糞になるというのは、学問に精だせという励まし